

共生・公正・創造



東日本タイムズ号外

<http://www1.biz.biglobe.ne.jp/~JRTU-HWU/>

ジェイアール東日本労働組合
〒108-0014 東京都港区芝5丁目33番36号
TEL (NTT) 03-3453-2107 (JR) 057-2290
発行者/今井 伸 編集者/平 憲治

【シリーズ23】

VI 松崎・JR革マル派のガードマンと墮した初代柴田善憲監査役以下多数の警察出身者

柴田氏は、松崎氏の“発言”情報どおり、多額の交際費を使って、かつての部下を高級料亭等に招待し、「車で送る」等のことをしているため、松崎氏や革マル派との関係を知らない現役警察官僚たちは、「あの人は素晴らしい人だ」などと称賛する者も少なくないようである。

柴田氏自身が仲人した警察官で、オウム真理教の麻原逮捕の写真を週刊誌に流したとして処分を受けた公安出身の人物を、一年早く退職させ、JR東日本の副課長で採用し、本来警視庁では発行しない「通行証」を発行しているとの噂など、柴田氏と親交の深い警察関係者のいろいろな話などについては紙数の都合もあるので別の機会にしたいと思う。

ともあれ、正・続『もう一つの「未完の国鉄改革」』で筆者が繰り返し記述したとおり、漆間巖・現警察庁長官、奥村万寿雄・現警視総監を含む歴代の警察庁警備局長が、国会答弁で「JR東労組内部に革マル派が相当浸透」と警告を発し、政府もまたその“事実”を「公文書で認識」（平成15年3月18日『内閣参質156第3号』）しているという現状の中で、あたかも「松崎氏及びJR革マル派のガードマン」に成り下がったかの如き奇っ怪至極な柴田善憲氏らキャリア警察官僚たちの反権力・反社会的動き、日本警察の信用を失墜させる危険な言動が何故許され、放置されているのか、筆者には理解不能である。いわゆる「失われた10年（＝日本警察の革マル派対策の失敗）」（川邊克朗『日本の警察』）の過ちを再び繰り返してはならない。警察の自浄能力の発揮、警察上層部による政治や既得権益に左右されない真に公正・適切な人事運用を切に期待するものだ。

今にして思えばだが、これまで縷々述べてきた内容と深い相関関係があることを感じさせる国鉄改革当時の「松崎発言」がある。1985年6月30日、松崎氏の動力車労組中央本部執行委員長就任に際して行われた記者会見の場で、同氏と労働記者との間で次の質疑応答があった。

【質問 尊敬する人物は誰ですか。

松崎 これは笑われるかも知れませんが、最近、秦野章さんの『何が権力か』という本を読みまして、その中に「マスコミこそ第二の権力だ」と書いてありました。まったく同感でありまして、日大の夜間部を卒業したそうですが、感性の鋭さを感じております。…】（松崎 明著『国鉄改革』上巻 p, 93）

松崎氏は、続けてプロ野球の王貞治選手と「サンデー兆治」こと村田投手の名を挙げているのだが、いずれにせよ松崎氏はこの時点で既に、尊敬する三人の人物の筆頭に秦野章氏の名を出しているのだ。他の二人は当時人気絶頂のプロ野球選手である。元警視総監秦野章氏はさぞかし気分が良かったことだろう。

たまたま、この箇所を執筆中の折しも産経新聞連載の「凜として」（題書は、横田早紀江さん）欄に、かつて過激派の小包爆弾事件で奥様を亡くされた土田国保元警視総監の、古武士的生き方を凜として貫き通したその生涯が数回に亘って綴られ、読む毎に感動し、最終回を読み終わって深い感銘を受けた。

警察内部の評価はどうか知らないが、筆者の独断では、警察キャリア官僚として、志の高さとその生きざまにおいて後藤田正晴元警察庁長官（後、中曽根内閣官房長官）よりも土田国保元警視総監が遙かに立派な人物であったように思える。ましてや柴田善憲氏など、その生き様があまりにも卑小で、同じ警察キャリア組でありながら“志”に差がありすぎ、比較する気にもなれない。

「革マル派対策10年の空白」、革マル派による「皇室警衛無線をも含む警察無線の傍受」、「JR総連・東労組への革マル派浸透の深度化」など、考え併せるとき、キャリアの風上にも置けない柴田善憲氏は、罪・万死に値するだろう。「恥を知れ！」と言いたい。

また、柴田善憲氏以下歴代の警察キャリア出身のJR東日本監査役と、その人々に随従、JR東日本で第二の人生を送った多数の警察出身者たち、さらに、今でもこのような人物と飲食を共にしている現職の警察官僚たちは、「JR総連・東労組内に革マル派が相当浸透」の事実に対し、一体どのように対応してきたのかが、今後、厳しく問われなければならないだろう。

＜JR東日本労政『二十年目の検証』170ページから171ページより抜粋＞

民主化の声・声・声・・・

2005. 11. 29

その23

(読んではいけない?) 「小説労働組合」の読み方! (3)

～月刊誌『自然と人間』を通じた党革マルとの関係?～②



* 「暮れの合意はどうしたのか。良い労働者党员というが、鉄道連合に攻撃をかけてきている組織のメンバーに違いはない。それと共同経営をするなど組織として議論も意思統一したこともない。現在でも鉄道連合は労働者党に組織攻撃をかけられているではないか。彼らの言っている内容についての提言は納得できる点もある。それは具体的に判断していけばいい。くり返すが、彼らと共同経営するのは反対だ。どうしてもというのなら、組織の意思統一をはかるのが前提だ」

鈴木が発言が終わらないうちに軽部委員長が口をはさんだ。「鈴木さん。言っておきますが、これは組織で決めたのですよ。組織が…意味は分かるでしょう」出席者は顔を見合わせて沈黙した。敵対している労働者党のメンバーと共同経営するなどという重大な方針を、決められるのは大元以外にはいない。まして、暮れに大元がまとめた内容と異なる案を出せるのは、大元本人以外の誰もできないと知っていたからである。

労働研究所の今後の方針をめぐる会議は、その後何回か開かれた。「労働者党メンバーと共同経営のあとは共同戦線か。俺は絶対に認められない」鈴木がそう主張すればするほど場はしらけた。すでに代表とは名ばかりになっていた。「いつまでそんなことを言っているのか。代表だけが足を引っ張っている。これでは少しも前にすすまないではないか」川下書記長の意見に出席者全員が深くうなずいた。鈴木の見解は無視され、大元の指示のもとに、労働研究所の新たな構想はどしどし進められていった。(p. 14～15)

東労組の組合員が配っている本であり、解説書まで出回っているわけであるが、告訴好きの団体のことを考え個人名は極力避けると、おそらくこの文脈の読み方は次のとおりであろう。

【鈴木(F氏)が『良い労働者党员(※党革マル派メンバー)といっても、鉄道連合(※JR総連)に攻撃をかけてきている組織のメンバーに違いはない。彼らの提言は納得できる点もあるが、組織の意思統一を図るのが前提だ』と言うと、鉄道連合の委員長が『鈴木さん、これは組織で決めたのですよ。組織が…意味は分かるでしょう』敵対している労働者党のメンバー(※党革マル派メンバー)と共同経営するなどという重大な方針を決められるのは大元(※M氏)以外にはいない】

このころ、JR総連OBの坂入さんが革マル派によって拉致されたという事件も発生しており、JR総連と革マル派が対立していたことは事実である。

民主化の声・声・声・・・

(続く)

共生・公正・創造



ユニオン・EYE

<http://www1a.biglobe.ne.jp/jrtu-EWU>

ジェイアール東日本労働組合
〒108-0014 東京都港区芝5丁目33番36号
TEL (NTT) 03-3453-2107 (JR) 057-2290
発行者/今井 伸 編集者/平 憲治

“テロリストに乗っ取られたJR東日本の真実”

『週刊現代—JR東日本革マル浸透問題告発—』 **連載第17回**

「JR革マル派43人リスト」一挙公開！

『週刊現代』が、JR東日本の革マル浸透問題を連載記事で告発した。本紙は驚くべきこの事実をシリーズで紹介する。（JR連合民主化闘争情報号外より一部抜粋）

＜週刊現代2006年11月13日発売号＞

—これが極左セクトに支配されている決定的証拠だ！—

「トラジャは、旧国鉄分割民営化直前の86年、松崎を中心とした旧『動労』革マル派が、組合活動家を抜擢し、革マル派“本体”に送り込み、『職業革命家』としての訓練を受けさせたグループ。JR革マル派組織のトップで、マンガローブの指導などに当たる組織です。一方のマンガローブは、分割民営化後のJR各社の労働組合における革マル派の組織防衛と拡大を目的に、JR革マル派内部で作られた組織なのです。目黒さつき会館（JR総連本部）の四階に常駐しているメンバーを頂点に、組合員に革マル派思想を浸透させると同時に、組合員からのカンパを革マル派本体に上納しているのです。ただトラジャもマンガローブも『組織防衛』の観点から、組織実態はもちろんのこと、その存在さえ、一般組合員に秘匿されているのが実態なのです。

…ただ、今なお、このピラミッドの頂点に君臨している人物が、松崎明だということだけは、間違いありません。そしてこのリストや、現在のJR東労組・JR総連本部の役員名簿から言えることは、JR東労組やJR総連が、JRの社員でもない、学生革マル派出身の組合プロパー職員や、首なし専従に喰いモノにされているということなのです

（元JR東労組中央執行委員・本間雄治氏）

「テロリストに乗っ取られたJR東日本の真実—『JR革マル派43人リスト』一挙公開—」と題するこの記事は、JR東労組が革マル派に支配されている決定的証拠を明らかにしている。

週刊誌は匿名で報道しているが、10月10日の「東労組を良くする会」の情報公開請求訴訟記者会見で一部リストは明らかになっている。それによると、石川本部委員長・千葉本部書記長・柳原本部副委員長・角岸最高顧問・奈良さつき企画社長・竹内顧問・高橋佳夫さつき企画勤務・林和美プロパー書記・大久保恵美プロパー書記・石井俊郎“プロパー書記”千葉地本書記長・高橋由美子プロパー書記・小田JR総連委員長・四茂野“プロパー書記”JR総連副委員長・船戸元東海労副委員長“目黒さつき会館4F常駐”らがマンガローブメンバー（革マル派）だという。

これでも「東労組に革マル派はいない」と言うのか！

共生・公正・創造



ユニオン・EYE

<http://www1a.biglobe.ne.jp/jrtu-EWU>

ジェイアール東日本労働組合
〒108-0014 東京都港区芝5丁目33番36号
TEL (NTT) 03-3453-2107 (JR) 057-2290
発行者/今井 伸 編集者/平 憲治



“テロリストに乗っ取られたJR東日本の真実”

「マングロブ」ダイジェスト版 第2回

あの「週刊現代」連載記事が【マングロブ】という本になった。本紙は筆者（西岡研介氏）の了解を得て、『謎に包まれた非合法集団とJR東日本の抜き差しならぬ関係』をダイジェスト版として紹介することとした。

警察庁が認めた二つの秘密組織

1996年8月10日早朝、警視庁公安部は極秘裏に、東京都足立区にあった10階建てマンション8階の1室を家宅捜索した。この革マル派の非公然アジトは、革マル派党中央指導部直轄のアジトで、同派にとって極めて重要な拠点だった。ここは後に「綾瀬アジト」と呼ばれる。そしてこの綾瀬アジトの摘発によって初めて、JRに巣食う二つの革マル派の秘密組織が存在することが明らかになったのだ。

その一つを「トラジャ」、もう一つを「マングロブ」という。トラジャとは、インドネシア・スラウェシ島の少数民族の名前だ。そしてマングロブは熱帯地域の河口の潮間帯に群生する植物の総称である。それらの名前を冠した、この二つの組織はいったい、何を目的にして作られたものなのか。

「松崎は、国鉄分割民営化前年の昭和61年ごろ、国鉄の組合の中でも過激な闘争をすることで知られた動労の組合員数人を、職業革命家として育てるべく、革マル派の中央に送り込んだ。そして1年後には、これらのメンバーを『トラジャ』と呼ぶことにしたのです。トラジャの任務は、JRはもちろんのこと、教育界や自治体、マスコミなど各界に浸透した、革マル派活動家を指導することです」（公安当局関係者）

綾瀬アジトの摘発によって、革マル派の中に「JR委員会」という組織が存在することも明らかになった。そして、このJR委員会に所属する約150人のメンバーが「マングロブ」というコードネームで呼ばれていたのだ。

「マングロブは、松崎がJR各社の組合員に革マル派思想を浸透させることを目的に作った組織です。メンバーの大部分が、トラジャと同じく、動労出身の組合員です。警視庁公安部は、綾瀬アジトから押収した大量の暗号文書を解読した結果、約150人いるとされるマングロブのうち約100人を特定したのですが、全員がJR総連の関係者で、うち6割が東労組の幹部や専従、組合員で占められていました。彼らは今でも、東労組をはじめ、JR総連傘下单組の内部に作った革マル派組織の防衛と、さらなる拡大を目指し、活動を続けているのです」（公安当局関係者）

まるで多足類生物のごとく、熱帯地域の河口の泥地に根を張りめぐらせる「マングロブ」。そのマングロブの根のように、配下の革マル派組合活動家を、JRの隅々まで浸透させてやる——。松崎が、JR内の革マル派秘密組織につけたコードネームからは、そんな彼の目論見が透けて見えるようだ。

【マングロブ（講談社）P. 32～P. 34】

共生・公正・創造



ユニオン・EYE

<http://www1a.biglobe.ne.jp/jrtu-EWU>

ジェイアール東日本労働組合
〒108-0014 東京都港区芝5丁目33番36号
TEL (NTT) 03-3453-2107 (JR) 057-2290
発行者/今井 伸 編集者/平 憲治



“テロリストに乗っ取られたJR東日本の真実”

「マングローブ」ダイジェスト版 第14回

あの「週刊現代」連載記事が【マングローブ】という本になった。本紙は筆者（西岡研介氏）の了解を得て、『謎に包まれた非合法集団とJR東日本の抜き差しならぬ関係』をダイジェスト版として紹介することとした。

組合を裏で操る「労研」の存在

元JR東労組幹部の本間氏は、私の取材に、これら「トラジャ」や「マングローブ」などの実態についてこう証言した。「トラジャは、国鉄分割民営化直前の86年、松崎を中心とした旧動労革マル派が、組合活動家を抜擢し、革マル派本体に送り込み、『職業革命家』としての訓練を受けさせたグループ。JR革マル派組織のトップで、マングローブの指導などに当たる組織です。一方のマングローブは、分割民営化後のJR各社の労働組合における革マル派の組織防衛と拡大を目的に、JR革マル派内部で作られた組織なのです。目黒さつき会館の四階に常駐しているメンバーを頂点に、組合員に革マル派思想を浸透させると同時に、組合員からのカンパを革マル派党本部に上納しているのです。…

そして、これ以外に〈Aメンバー〉などの秘密組織も登場するのだ。本間氏が再び語る。
「Aメンバーは革マル派シンパで『ハイスクールメンバー』とも呼ばれています。約10～20人で『A会議』を作り、『A会議』は各地方に1～十数個あるといわれています。このAメンバーを指導するのがマングローブ。『ユニバーシティ』はマングローブの別名です。マングローブは各地方のA会議に出向き指導する。Aメンバーとの個別学習会や議論を通じて、松崎や革マル派の思想を叩き込む。さらにそのAメンバーが今度は『Lメンバー』と呼ばれる組合員を指導する。

『L』とは革マル派の機関紙『解放』(Liberation)の頭文字。Aメンバーは組合活動に熱心な組合員のなかから、Lメンバーをピックアップし、革命を意識的に考える学習会『L会議』を作るのです。『L会議』では、『解放』など革マル派の文献などを使って学習し、組合員の指導や、運動上の問題点を議論します。『L会議』も各地方に数十個存在するといわれているのですが、お互いをペンネームで呼び合うなど秘匿性が高く、会議に参加している者しか『Lメンバー』はわからない。そして、この『Aメンバー』や『Lメンバー』も毎月、革マル派にカンパを上納しているのです」

そしてさらにJR東労組には、組合全員で操る『労研』という組織も存在するという。本間氏が続ける。「実はJR東労組は二重構造になっていて、JR東労組を実質的に支配しているのが、この『労研』なのです。『Aメンバー』、『Lメンバー』たちが組合活動に熱心な組合役員をピックアップし、『労研』への入会の決意を促すのです。実際、この『労研』から多くの幹部が輩出されています。

また労研は『中央労研』、「地方労研」、「支部労研」と縦組織になっており、中央会費、地方会費、支部会費などが定期的に集められ革マル派に上納される。この労研は『革マル派のフラクション（細胞）の一つと言われているのです。当然のことながら革マル派の影響を色濃く受けており、松崎の著書などを教材に学ぶのです」

【マングローブ（講談社）P. 201～P. 203】

共生・公正・創造



ユニオン・EYE

<http://www1a.biglobe.ne.jp/jrtu-EWU>

ジェイアール東日本労働組合
〒108-0014 東京都港区芝5丁目33番36号
TEL (NTT) 03-3453-2107 (JR) 057-2290
発行者/今井 伸 編集者/平 憲治

「JR総連・東労組」崩壊の兆し!?

「国鉄改革の裏側」ダイジェスト版 第7回

あの元国鉄労働課長が明かす「国鉄改革の裏側第5弾」が【「JR総連・東労組」崩壊の兆し!?!】という本になった。本紙は筆者（宗形明氏）の了解を得て、『JR東日本革マル問題の現状』をダイジェスト版として紹介することとした。

谷川忍『小説労働組合』と福原福太郎『発刊以後』

同書で私が最も注目したのは、「小説」の体裁をとりながら、福原氏が、今も続く党革マル派と松崎氏の濃密な関係を、読者がはっきり認識できるよう、意図的に暴露したことだ。

◆「俺<※福原>は労働研究所<※「自然と人間」社>を会社組織に転換するのはいい。しかし、そこに鉄道連合<※JR総連>を攻撃している労働者党<※革マル派>のメンバーを入れることは反対だ。皆が言う良いメンバーかどうかの問題ではない。彼らを入れる事自体を認められない。そうしたいのなら、最低限、組織の中で議論し意思統一をはかるのが当然ではないか。」 ◆2002年が明けた。労働研究所の会議には、常連メンバーのほかに、鉄道連合の軽部委員長<※JR総連小田裕司委員長>と川下書記長<※同山下信二書記長>が参加するようになっていた。軽部が口を開いた。「暮れから、良心的な労働者党メンバーと交流してきた。彼らの中に、雑誌編集に詳しい者がいて『労研』について意見交換をした。いくつかのアドヴァイスがあった。先ず、今のような内容では面白くないということだった。執筆者についても鉄道連合のOBではなくプロに依頼した方がいい。経営については労働組合との関係は切断して民間会社にしたらどうか。場所も鉄道連合と同じ住所ではない方がいいとの意見だ。彼らは人も出さずし投資も考えていいと言っていた。検討するのは当然だが、結論はできる限り早い方がいい。鉄道連合は前向きに考えている」 ◆大元<※松崎明>の朝令暮改は日常茶飯事だ。そのことはリーダーとして必要なことである。鈴木<※福原>がとやかくいうことではない。問題は、敵対関係にある労働者党のメンバーと共同の編集、経営をするなどという点だ。いくら大元の指示であっても鈴木は納得できなかった。 ◆「暮れの合意はどうしたのか。良い労働者党員というが、鉄道連合に攻撃をかけている組織のメンバーに違いはない。それと共同経営をするなど組織として議論も意思統一したこともない。現在でも鉄道連合は労働者党に組織攻撃をされているのではないか。彼らの言っている内容についての提言は納得できる点もある。それは具体的に判断していけばいい。くり返すが、彼らと共同経営するのは反対だ。どうしてもというのなら、組織の意思統一をはかるのが前提だ」 鈴木が発言が終わらないうちに軽部委員長が口をはさんだ。「鈴木さん。言っておきますが、これは組織で決めたのですよ。組織が…意味は分かるでしょう」 出席者は顔を見合わせて沈黙した。敵対している労働者党のメンバーと共同経営するなどという重大な方針を、決められるのは大元以外にはいない。まして、暮れに大元がまとめた内容と異なる案を出せるのは、大元本人以外の誰もできないと知っていたからである。労働研究所の今後の方針をめぐる会議は、その後何回か開かれた。「労働者党メンバーと共同経営のあとは共同戦線か。俺は絶対に認められない」 鈴木がそう主張すればするほど場はしらけた。すでに代表とは名ばかりになっていた。「いつまでそんなことを言っているのか。代表だけが足を引っ張っている。これでは少しも前にすすまないではないか」 川下書記長の意見に出席者全員が深くうなずいた。鈴木は意見は無視され、大元の指示のもとに、労働研究所の新たな構想はどしどし進められていった。 ◆軽部委員長が大元に鈴木への処遇について報告した。（軽部が）鈴木と顧問の留任を確認した次の日である。報告が終わらないうちに大元は軽部を怒鳴りつけた。「なにを寝ぼけているんだ。鈴木を誰が保障するとか。鈴木がケジメをつけるために辞任するなどというのは本音じゃあない。オレからの逃亡だよ。すぐに鈴木への顧問留任を撤回しろ」 大元は2月の始めに受けとった鈴木の手紙を思い出した。 — 中略 —

大元は面白くなかった。 近くにいた鉄道協会理事長の武藤<※ 佐藤政雄>に手紙を投げて言った。「鈴木野郎、65歳でケジメなどと格好つけるなっていうんだ。 オレや武藤に対する面当てだよ。 何歳になろうとも、この組織に君臨していくんだ」 大元に宛てた鈴木の手紙は、鉄道連合の役員達に回し読みされた。 何日かたって鈴木が挨拶に来た。 大元は洪面をつくって横を向いたまま一言も口をきかなかった。

大元は辞任のこともさることながら、自分が鉄道連合の役員に指示した労働研究所の新しい構想に、鈴木が反対しているのも癪にさわっていた。(p. 16~17)

— 中略 —

やがて、「大元が鈴木への顧問留任を要請したにもかかわらず、鈴木が拒否した」との話が組織内に広げられていった。(p. 18)

— 中略 —

後に会議の報告を受けた大元が軽部達を怒鳴りつけた。「鈴木をなぜ辞任ではなく解任にしなかったのか。なぜ有志会議<※「JR労研」幹部会議>から除名しなかったのか。ボケもいいとこだな。鈴木は解任で除名だ。いいな」(p. 19)】

私がビクビク仰天したのは、福原社長の『自然と人間』社の経営や、月刊誌『自然と人間』の編集を巡って、松崎氏の意向を受けて党革マル派とJR革マル派が幾度も会議を開き、共同経営に向けて動き出していたことだ。 しかも奇怪なことにこの時期は、例の革マル派によるJR東労組OB「南雲巴」こと坂入充氏拉致監禁事件をめぐる、表向きには革マル派対JR総連・東労組との対立構図が華々しく演出されていたのである。

そして私が得た情報では、事実、坂入充氏の帰宅と前後して複数の革マル派活動家が『自然と人間』社に入社している。不審きわまりない「坂入事件」の謎も何一つとして解明されていない。「JR東日本革マル問題」の間は限りなく深く、かつ濃い。

さて、谷川忍の筆名で『小説 労働組合』を刊行した福原福太郎氏は、06年9月、今度は実名で『小説労働組合』発刊以後』を世に出した。 こころも反本部派と「東労組を良くする会」を「組織再生グループ」と呼んでその活動を評価する一方、松崎・本部派を痛烈に批判している。

最後に、私は党革マル派と福原福太郎氏との関係にある疑念を抱いているのだが、この点についてはいずれかの時機に、稿を改めて論述したいと思う。

【「JR総連・東労組」崩壊の兆し!?! (高木書房) P.90~P.96】

共生・公正・創造



ユニオン・EYE

<http://www1a.biglobe.ne.jp/jrtu-EWU>

ジェイアール東日本労働組合
〒108-0014 東京都港区芝5丁目33番36号
TEL (NTT) 03-3453-2107 (JR) 057-2290
発行者/今井 伸 編集者/久保田 勉

宗形明
「異形の労働組合指導者
『松崎明の誤算と蹉跌』」

“異形の労働組合指導者『松崎明』の誤算と蹉跌”

「国鉄改革の裏側」ダイジェスト版 第22回

あの元国鉄労働課長が明かす「国鉄改革の裏側第6弾」が【異形の労働組合指導者「松崎明」の誤算と蹉跌】という本になった。本紙は筆者（宗形明氏）の了解を得て、『JR東日本革マル問題の真相と現状』をダイジェスト版として紹介することとした。

JR東日本労政の回顧と展望・・・その4 「有罪被告社員懲戒解雇処分が分岐点！」

・・・浦和電車区事件第一審有罪被告社員の懲戒解雇処分問題でガチンコ対決となったJR東日本と松崎及びチルドレン集団との関係はもう元に戻る筈がない。・・・JR東日本には、住田・松田コンビ労政時代の後遺症、桎梏から悩ましいこと苦しいことは多々あろうが、労政変更の先送り逡巡はもはや許されない。これは時代の流れである。・・・浦和電車区事件裁判日の傍聴券取得活動に狩り出されるなど、有罪・懲戒解雇社員支援闘争に組合員は疲れ切り、しかし組合の統一基本方針へ口に出せない不満は職場に充満している。・・・

今年はJR東日本経営陣にとって「鼎の軽重を問われる重大な年」だと私は思っている。私は、3月、「JR総連・東労組・梁次邦夫原告」裁判の被告側証人として本間雄治氏と共に東京地裁に出廷、証言した。当日、原告側代理人は、「私はマンガープの一員でした…」と、真実を告白した本間氏に対して、枝葉末節の事柄につき重箱の隅をつつくような尋問を繰り返すのみだった。これでは、松崎氏及びJR総連、東労組が「政府見解」「歴代警察庁警備局長国答弁」を権力側のデマ、でっち上げなどと完全否定してきたこととの関係上、国会質疑題が再燃することは必至だと思う。そして、JR東日本代表者の参考人招致なども避けられないだろう。加えて、JR革マル派43人リスト裁判がある。こちらは松崎及びチルドレン集団側が突然仕掛けた戦争である。9名の被告の中には表裏を知り尽くした「松崎組」元幹部が相当数含まれている。驚愕的事実が次々と表出して来るであろうことは想像に難くない。そして更に『小説 労働組合』を巡る「福原福太郎被告裁判」である。いったい何が飛び出してくることやら、興味津々だ。

『治安フォーラム』の2009年3月号に、西野誠名の「東労組の組織体質に関する一考察」という論考が掲載され、興味深く読んだ。その中に、次のような記述がある。【平成20年12月9日、松崎元会長ほか42人が、同氏に批判的な元東労組役員を相手に、“元役員ら東労組関係者43人と革マル派の関係等を記したリストをマスミ関係者に配付したことで名誉を傷つけられた”として、損害賠償を求めた裁判の第一公判が開かれた。その公判後の集会では、松崎元会長が「浦和電車区事件」の被告人を“労働者の鑑”と持ち上げ、組合脱退と退職を強要した犯罪行為についても、“労働運動である”として強く肯定した。さらに、“反戦、平和のためには革命が必要”と説き、最後には、訴訟の相手側であり、かつては「同志」として組合活動を共にした元東労組の役員らに向けて、“本来の革マル魂を忘れるなよ”などと意味深長な発言を行っている。東労組は、現在も、松崎元会長の理論を日々実践するなど、同氏の影を大きく受けていることは間違いなく、今後もその動向を注視していく必要がある】

執筆には公安警察関係者のOBや現役が多いとも言われている『治安フォーラム』の性格からすると、これは「現在の公安警察の重要な一つの視点」と考えられる。「JR東日本革マル問題」にとって、間違いなく今年こそ、“大変動”の予感大である。

【異形の労働組合指導者「松崎明」の誤算と蹉跌（高木書房）P.202～P.219】